

1. トップメッセージ



滋賀医科大学学長塩田浩平

滋賀医科大学は、「一県一医大」構想の下、医学部医学科の単科大学として昭和 49 年に開学しました。附属病院の開院や大学院医学系研究科の設置を経て現在に至っています。

この間、日本と世界をとりまく環境問題の状況は大きく変化しました。

1950～60 年代は急速な工業化に伴い各地で公害が発生、その対策が国レベルで行われました。環境庁の設置や公害関係法令の整備がこの時期に行われています。その後、1980 年代から 90 年代になると、環境問題は国際化していきます。オゾン層破壊や酸性雨など、一国では解決できない問題が重要視されるようになってきました。それを受けて、「持続可能な発展」というキーワードのもと、1992 年に国連環境開発会議が実施されると、引き続き気候変動や生物多様性に関する重要条約が成立し、多国間での対応枠組みができて今日に至っています。

このような時代背景において、本学も環境問題への取り組みとして様々な対応を行ってきました。

「公害」の時代は、現在から見れば緩やかな対応でしたが、環境問題が国際化した 1990 年以降は、本学もいよいよ環境への本格的な配慮を払う必要に迫られてきました。特に重要なのは、エネルギーとそれに伴う温室効果ガス排出の問題でした。附属病院をかかえる本学は、エネルギーをどうしても

多く消費してしまいます。そのエネルギー消費をできるだけ少なくすることが最も重要と考え、対策を実施してきました。本学は平成 23 年度に病院再開発事業が完了し診療や研究活動等が活性化したことにより必要なエネルギー量が一時的に増加していますが、その後は漸近的に消費エネルギー量が減少傾向にあります。これはひとえに、構成員(教職員学生)の省エネ意識の向上や各種省エネ活動の成果と考えています。

また、滋賀医科大学では、平成 28 年度からの第 3 期中期目標・中期計画において、“環境に配慮したキャンパス環境を創造するため、省エネルギー計画を策定し、施設設備の点検・評価に基づき、ESCO 事業の活用を含めた施設整備再生計画を実施する。”と策定しました。今後も大学としての活動が活発化していき必要なエネルギー消費量が増加していく中で、エネルギー消費量の削減に取り組んで行く必要があります。そのための戦略のひとつとして空調・変圧器等の高効率化など省エネ性の高い機器への改修を積極的に推進するとともに、学生・教職員に対し空調の適切な温度設定、空調・照明の使用時間の節約等自身で可能な省エネ・節電行動に努めていきます。

滋賀医科大学は、第 3 期中期目標期間のキーワードとして、“3C”

- 1.Creation(優れた医療人の育成と新しい医学・看護学・医療の創造)
- 2.Challenge(優れた研究による人類社会・現代文明の課題解決への挑戦)
- 3.Contribution(医学・看護学・医療を通じた社会貢献)

を掲げ、地域に支えられ、地域に貢献し、世界に羽ばたく大学として、人々の健康、医療、福祉の向上と発展に貢献して参ります。